都筑北部の見どころ資料編 (①つづき五山を巡り桜を楽しむ)　20180315

都筑五山とは

「都筑五山」は古くから云い伝えられてきた名称ではなく、ニュータウンの中央部（センター）のまちづくりで、自然を生かした地形や地物の保全、歴史的資源の活用、文化の発信を核としたテーマ設定および推進のために名づけられた。

開発以前は山と呼ばれていた「吾妻山」、城山と呼ばれていた「茅ケ崎城祉」の山に加え、「都筑中央公園」「大塚歳勝土遺跡公園」「中川八幡山公園」を山として加え、五山となった。

都筑五山の比較

名称	開園時期	広さ（平方m）	最高点（海抜）
茅ケ綺城祉公園	平成 20 年（2008）	24,876	35m
大塚歳勝土遺跡公園	平成８年（1996）	54,640	50m
中川八幡山公園	平成 11 年（1999）	32,362	40m
都筑中央公園	平成 10 年（1998）	196,200	50m
吾妻山公園	平成 18 年（2006）	9,260	32m

中川八幡山公園

縄文・弥生時代及び平安時代の竪穴住居跡や石器・土器が発掘された遺跡公園である。発掘調査のあと埋め戻し、西側の半分を残して八幡山公園として整備された。港北ニュータウンの中心となるセンター南駅・センター北駅を見渡せるビューポイント、桜も見事で、夜景も美しい公園である。

都筑中央公園

都筑中央公園は、最寄り駅の横浜市営地下鉄センター南駅から、直線距離 330m、徒歩 5 分の所にある、そこは横浜の谷戸地形と植生を保全した、面積約 19.6ha、都筑区最大の総合公園である。中央公園は、海抜 23m～57m にあって、荏田東４丁目と茅ヶ崎中央に跨って位置し、南北にその境がある。その境は尾根にあって、一部は境に沿って、公園になる前に植えられた杉が残っている。公園には 5 つの谷戸があり、ばじょうじ・宮・境田・清水・堰の谷戸からなりたっている。

展望広場にある港北ニュータウン記念碑

ステージ広場では各種のイベントも開催

各谷戸の間は樹林で区画されていて、尾根で結合されている。　各谷戸の傾斜は、一般に、北斜面が南斜面より切り立っている。各谷戸奥には、僅かであるが、湧水が見られる。公園入り口は、各谷戸の底部と歩行者専用道につながる歩道橋にある。各園路の傾斜は、入り口から尾根に向かって、高低差が約 10～30m である。堰の谷戸は、生物相保護区として、生物多様性を保全するため一般の入所を制限している。

生物相保護区

グリーンマトリックス・システム生物相の保全を行うため立ち入りを制限した範囲を、茅ケ崎公園（自然生態園）、鴨池公園、都筑中央公園内に 3 ヶ所設置している。

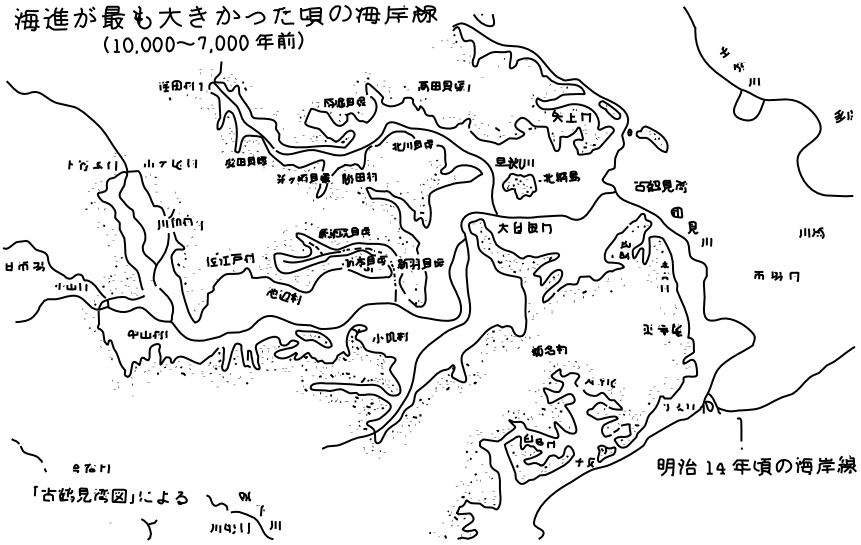
公園内施設

ばじょうじ谷戸には、休憩所・炭焼き施設・水田・畑・孟宗竹林・梅林・アジサイ植栽・各種桜・雑木林・ばじょうじ谷戸池などある。ここでは、都筑里山倶楽部の主催する各種イベントが行われ、そのイベント情報は、園内・ホームページで見ることができる。ばじょうじ谷戸を登った、海抜 57.1m の展望広場には、港北ニュータウン記念碑と野外ステージかある。宮谷戸には、レストハウス・宮谷戸大池・円形広場・有料駐車場・各種桜・各種紅葉する樹木・炭焼き施設などある。レストハウスには港北ニュータウン計画の資料や、都筑里山倶楽部の活動情報が展示されている。　境田谷戸には、公園詰め所・境田貝塚跡・杉植林・桜などがある。公園造成にあたって造られた宮谷戸大池の水は、宮谷戸の湧水である。清水谷戸には、あまり施設はないが、生物相は豊である。堰の谷戸には、通常は閉鎖されている入り口が、谷戸出口にあり、生物相を保護している。

境田貝塚

境田貝塚はハマグリや温暖種のハイガイなどを主体とした縄文時代前期（約 6､000～5､500 年前）の貝塚です。貝塚は物の捨て場（ゴミ捨て場）で、ムラのまわりなどに貝殻等を捨て、積み重なってできたものです。

現在よりも温暖であったこの時代、港北ニュータウンの中央を流れる早淵川流域には、海が入り込んでいました。（縄文海進）この付近は古鶴見湾の奥の入江になります。入江の周辺の丘の土には、貝塚を伴ったムラがいくつか形成され、その最奥部の海辺を見下ろす場所に位置している境田貝塚もそうしたムラの一つと考えられます。発掘調査では、弥生時代・古墳時代の住居址は発見されていますが。貝塚をつくった時代の住居祉はまだ確認されていません。



茅ケ崎城址公園

茅ヶ崎城址は「空掘」「郭」「土塁」などが良好な状態で残る、貴重な中世城郭遺跡です。
早淵川を北に望む自然の丘を利用して築城されています。
茅ヶ崎城は 14 世紀末～15 世紀前半に最も大きな構えとなりました。　16 世紀末までには、城としての役割は終わりました。江戸時代には徳川氏の領地となり、村の入会地（共用地）などとして利用されていました。「城山」という地名とともに、今日まで保存されてきたのです。

空堀

水がしみ通ってしまうローム層を基盤とする横浜の城では空堀が多くつくられました。空堀は底が上で、その形状は横断面が逆台形の「箱堀」が多く見られました。茅ケ崎城址の堀は両側の壁が七十度と垂直に近く、またローム層が堅いために取り付きにくく防御面で大変すぐれていました

◆虎口

城の出入り口は、「虎口（小口）」といいます。いざというときにすぐに封鎖できるように、また敵が侵入しにくいように、できるだけ幅を狭くしています。城の防御と攻撃の両面において重要な場所であり、様々な工夫が加えられました。

◆根小屋

根小屋とは城下町というものがまだない時代の、城主や重臣達の居住地区のことです。この時代の城主は普段は本丸や主郭に居住せず、郭の麓につくられた根小屋で生活し、いざ戦となったときにのみ、城に立て籠もりました。

◆東郭

東郭は城の中でも最も高い位置にあり、「中原街道」や「矢倉沢街道」の街道筋を見渡せるほど見晴らしがよいため物見台の役割を持っていました。また、城郭の中でも最高所にあるため、戦の際には最後に逃げ込んで籠城する場所と推定されます。

◆郭
　堀や土塁、石垣などで囲まれた区画を郭といい、「曲輪」とも表記されます。江戸時代には「丸」とも呼ばれました。城の中心となる郭は、「主郭」または「本曲輪」と呼ばれ、江戸時代には「本丸」と呼ばれました。また、戦国時代の丘城は、自然の地形を巧みに利用して築かれています。主要な郭の外側や丘陵の中腹にもさまざまな区画が見られます。
◆土塁
　堀を掘った土を盛って築き上げた堤のことで、敵を阻止し反撃する際の足がかりとする役割がありました。したがって、規模の大きな土塁ほど防御効果が大きいといえます。
堀と土塁の築造は一体となって行われ、表土を削り、土盛りをする部分は山の斜面を平らに削って帯状のテラスを作りました。ここに黒土を置いて叩きしめ、盛り土が崩れないように基礎を作りました。本城址の主な土塁は堀底から７メートルから８メートル、郭内から高さ２．５メートル以上、基底部の幅は７メートルから８メートルあったと推定されます。土塁の側面にはＦ武者走り」とか「犬走り」とよばれる施設がつくられました。これは、連絡用の通路としての役割とともに、土塁を越えようとする敵を上方から攻撃するための足場としての役割もありました。

大塚遺跡の縮尺模型

際勝土遺跡

未発掘の墳墓群

大塚遺跡
　大塚遺跡は、鶴見川の支流早渕川を見下ろす、標高 50m ほどの小高い丘の上にあります。近くに川があり、見晴らしのよいところです。大塚遺跡では、延べ 115 に及ぶ竪穴住居跡が発見されました。ともに弥生時代の大集落のあとですが、大塚遺跡に見られる大きな特徴が二つあります。その一つが、「環濠（かんごう）」と呼ばれ、ムラをとり囲んでいる深い溝があることです。環濠は小高い大地のふちに、ほぼ地形に沿ってひょうたんの形に掘りめぐらされています。
幅 4m、深さ 2m ほど、600m にわたって掘られ、その外側には掘った土を積み上げて土塁が築かれています。また、土塁の上には本の柵を設けました。外との出入りには、橋を使いました。大塚遺跡のように、周りを溝でめぐらしたムラの形のことを「環濠集落」と呼びます。
　幅４ｍ、深さ 2m の溝を、簡単に人間が越えることはできません。つまり、環濠は外からムラに入ってこられないようにしたものと考えることができます。ムラそのもの、あるいはムラに住む人々を守るために作られたのです。縄文時代には、このような環濠集落はほとんどありませんでした。弥生時代になると、新潟県から鹿児島県の広い範囲で、環濠集落がつくられるようになりました。人々の生活は、米づくりが中心でした。米づくりの技術は朝鮮半島から入ってきましたが、同時に溝を巡らせてムラを守るという方法も入ってきたと考えられています。米作りが盛んになるにつれ、高床倉庫のような建物に食料を保存することができるようになったため、人々の生活は安定し、人口が増えていきました。次第にムラが増えていき、耕地をめぐってムラとムラが争うようになっていきます。
　大塚遺跡では、85 軒の竪穴住居跡と 10 棟の高床倉庫が発見されました。これらは、全てが同時に建てられたのではなく、３つの時期に分けて作られました。
　ムラでは、10 軒前後の竪穴住居と 1～2 軒の高床倉庫とを一つのグループとして、それが３グループ集まって生活していました。100 人以上の人々が、ムラ長（おさ）を中心に生活に必要な仕事をしていました。米の脱穀、土器づくり、機織り、竪穴住居作り、そして、お墓作りもありました。

歳勝土（さいかちど）遺跡

大塚遺跡のもう一つの特徴、それはムラの外に大きなお墓があることです。このお墓を「方形周溝墓（ほうけいしゅうこうぼ）」と呼びます。一辺が 10m ぐらいの正方形を溝で囲み、その内側に低く土を盛り上げて、その中心に亡くなった人を埋葬するもので、25 個が見つかっています。

家の長（おさ）が亡くなると、ムラの人たちは約 80m 離れた墓地にきて、新しい方形周溝墓を作ります。そして、木の棺に入れた家長を盛り土の中央に埋めます。お墓のヘリには土器が備えられています。家族が亡くなったときは、周りの溝の中に穴を掘り埋めました。子供の場合は、土器が棺として使われました。　この墓地の遺跡を「歳勝土遺跡」と呼んでいます。大塚遺跡と歳勝土遺跡のように、集落と墓地が一体となって作られている遺跡は大変珍しく、昭和 61 年（1986）国の史跡に指定されました。

＊市教育委員会「わたしたちの横浜よこはまの歴史」より転載

民家園

長沢家は、都筑郡牛久保村（現在の都筑区牛久保町）にあった旧家で、江戸時代の一時期、村方三役の名主や組頭を務めています。旧長澤家住宅の建築年代は、新しい形式を取り入れられているものの、柱の一部にチョウナ仕上が見られること、土間境の柱が大黒柱になっていないことなどの古い形式を残しているため、横浜に残っている民家の中では、かなり古いものであることが分かりました。家が建っていたかっての環境は、丘陵地の裾に会って、屋敷の南側が谷戸田の水田で、その東に肥料小屋の「しもや」、西南に物置、東南に車庫があって、東北には竹藪、北側には太いケヤキの老木がありました。

主屋・馬屋　　主屋と馬屋はロウカでつながれ、棟をそろえて連続して建てられています。主屋の柱は一間毎にたてられ、各柱間には板戸 2 枚と障子戸 1 枚が入りす。

オクノマ・オク　名主の役宅としての接客間で、２室とも畳敷きで天井が張られ、オクに奥行 3 尺の床の間がついています。当時の家格式の高さをあらわしています。

ヒロマ　　広い板敷きの間は、家族の日常の間として、食事や団秦、親しい人の接客、また夜なべ仕事などに使われました。土間・ヒロマ境　土間とヒロマ境の４本の柱は、まだ大黒柱という意識が見られず、ほとんど同じ太さとなっています。

土間　　広い土間は、収穫した穀類の調整などの作業の場として、農家にはなくてはならない空間でした。土間の奥が炊事をするダイドコロです。

（都筑民家園パンフレット「都筑民家園をあそぶ」より）

馬屋を取り込んだ民家

広々とした空間を構成

土間には竈がある

茅ヶ崎杉山神社

伝承

1　大化３年（647）千葉県の安房郡にあるある安房神社を祀っていた忌部氏の一族が東京湾を渡り、鶴見川沿いの早淵川に入植して現在の地に杉山神社を興した。

2　元々の農耕集団の氏神が統一されて造られた。

杉山神社の本社は？

杉山神社の名前が初めて歴史上にあらわれるのは平安時代です。『続日本書紀』承知５年（838）２月の条に「武蔵野国都筑郡の杉山神社が霊験あるをもって官幣に預かった」とあります。また、平安時代（900 年代の初め）の「延喜式」という神名帳によれば「武蔵野国都筑郡に式内社と呼ばれる各式のある神社が一社あり、杉山神社という」とあります。では、「杉山神社の本社はどこか。「御祭神は誰か」ら盛んに議論されてきましたが、いまだに定説がありません。

神社脇にある岩に由来が書かれています

静かなたたずまいの杉山神社

歴史博物館の展望台よりゴリラの「つづきまもる君」も見えます　遺跡公園へのブリッジ　展望台からの吾妻山公園

港北ニュータウンメモ

・1965 年 「横浜市六大事業」の 1 つとして発表、1974 年土地区画整理事業の建設省より認可

・1983 年　大規模集合住宅で入居が開始、1986 年に企業の研究所・本社の誘致計画が追加された

・1993 年 3 月　市営地下鉄ブルーラインの延伸(新横浜～あざみ野)

・1994 年　港北ニュータウンを中心とする地域を都筑区として分区。

・1996 年 港北ニュータウン土地区画整理事業完了

・2008 年 3 月　グリーンライン開業(日吉～中山)

・1995 年　第3京浜道路の都筑インターチェンジ開設　1998年北駅にあいたい、南駅に港北東急オープン

・2000 年　モザイクモール都筑阪急オープン(大観覧車も)

・2001 年　昭和医大北部病院が開院、

・2002 年 横浜国際競技場でワールドカップ開催。決勝戦。 横浜国際総合プールでパンパシフイック水泳大会。

・2007 年　ノースポートモール、港北MINAMO。（鴨居のララポートも） 2006 年 IKEA